

クトゥルフリプレイ 注文「も
」多いレストラン

kurukurukururi3

キャラクター紹介

平野長吉(♂) 職業：メニュー模型を作る人 年齢22 PL:masso

STR:6 DEX:13 INT:16 アイテム:7:80
CON:12 APP:13 POW:14 幸運:70
SIZ:8 SAN:70 EDU:10 知識:50
HP:9 MP:14 回避:26 ゲームマスター:表参照

[技能] (職業技能点:EDU*20 個人技能点:INT*10)

応急手当：51% 化学：80% 聞き耳：85%
写真術：75% 芸術（メニューの模型）：80%
目星：85%

[持ち物]

・小道具、着色料、合成樹脂
・懐中電灯 ・カメラ

[プロフィール]

「仕事で食品サンプルを作っております。体力も知力も自信はありませんが、精いっぱい頑張ります。」

こくにゃん(♂) 職業：着ぐるみの中の人 年齢：23 PL:Zaki

STR:7 DEX:18 INT:13 アイテム:6:5
CON:16 APP:9 POW:12 幸運:70
SIZ:14 SAN:70 EDU:15 知識:75
HP:13 MP:12 回避:36 ゲームマスター:表参照

[技能] (職業技能点:EDU*20 個人技能点:INT*10)

言いくるめ：45% 医学：60% 応急手当：60%
鍵明け：31% 聞き耳：85%
忍び歩き：70% 心理学：65% 精神分析：30%
目星：55%

[持ち物]

着ぐるみ、タオル、制汗剤、消臭剤、保冷剤

[プロフィール]

「普段は医学生をしています、着ぐるみもしています。あまり長時間着ぐるみをしていると、ワキガが臭ってしまうのですが、文明の利器（制汗剤・消臭剤）でなんとかかしています。」

船橋たかし(♂) 職業：学生 年齢：20 PL:Aruk

STR:10 DEX:12 INT:18 アイテム:7:90
CON:9 APP:12 POW:13 幸運:65
SIZ:13 SAN:65 EDU:11 知識:55

HP:10 MP:13 回避:24 ゲームマスター:表参照

[技能] (職業技能点:EDU*20 個人技能点:INT*10)

化学:26% 隠れる:60% 聞き耳:55%

芸術:55% 忍び歩き:35% 生物学:71%

図書館:75% 博物学:60% 母国語:55%

目星:75% 薬学:51%

[持ち物]

・財布、スマホ

・ゆるキャラ祭の戦利品

[プロフィール]

「大学の文学部です。趣味で絵をかいてます。」

竹内美望 (ニャモ) (♀) 職業:学生 年齢:20 PL:M0ti

STR:6 DEX:10 INT:13 アイテム:65

CON:11 APP:10 POW:15 幸運:75

SIZ:8 SAN:75 EDU:17 知識:85

HP:9 MP:10 回避:20 ゲームマスター:表参照

[技能] (職業技能点:EDU*20 個人技能点:INT*10)

言いくるめ:75% オカルト:75% 聞き耳:70%

考古学:51% 心理学:70%

投てき:55% 図書館:70% 変装:26%

目星:30% 歴史:80%

[持ち物]

財布、スマホ

バイク、タオル

[プロフィール]

「船橋さんと同じ大学に通っています。理学部なので知り合いではありませんが。」

1. 導入

休みの日は少し遠出をしておいしい食事を食べてみたい。
そんな何気ない気分であなた方が訪れたレストランで起きた不思議な出来事。

平野side

平野は食事が好きだった。それ故この仕事は平野にとって天職ともいえた。
収入は決して多くはなかったが、趣味というものも特になく平野にとってはたいした問題ではなかった。

「こっちの方、ですよ。」

両側にせり出すように木々が並び、お世辞にも舗装されているとは言い難い道を進む。
少ない収入の中から購入した軽自動車は時たま大きく揺れるものの特に問題なく進んでいた。

「どんなお店なんだろう。」

口コミには写真こそなかったが『眺めが良い場所にあり、料理が美味しい』と書いてあった。
写真がないからこそ気になる。

食事としても、見た目的な問題としても。職人として。

「.....合って...ますか？」

何も無い道をひたすら進む。「あ。」思わず声が漏れた。

平野の視線の先にロッジ風のレストランが見えてきた。

こくにゃんside

「あついニャー」

ぺにより、ぺにより。

SEを付ければそんな感じだろうか。

爽やかな木々に吹き抜ける風、時折聞こえてくる鳥の声の中、明らかに異質な着ぐるみ。
白いもふもふとした体に、一抱え以上もある大きさの顔。

くりっくりに目に尖った耳は、ネコということがわかる。

ゆらりと伸びた尻尾の先には丸い球がついていて、歩くのに合わせて左右に揺れる。

「こっちであってるかニャー？」

漏らされる声は、キャラの時とは違い低くけだるげ。

キャラとしての語尾ですら投げやりさが伺われる。

こくにゃんが店の存在を知ったのは先週のこと。

こくにゃんとしてのブログに今日のゆるきゃら祭参加について書いたところ、コメントがついたのだ。

『そこから少し離れたところですが、美味しいレストランがありますよ！』

普段なら特に気にしないのだが、この時はこくにゃん。ファンサービスは必要なのだ。

『そうなのかニャ？気になるニャー！』

「あの時の俺まじ死ねし。」

暑いし、重いし、疲れたし。

キャラすら放棄して、こくにゃんはぼやく。

空腹は限界に達しているし、心なしか頭痛もしてきた気がする。

けれどこくにゃんにはこれを脱げない理由があった。

「捕まるよなあ。」

着替えが、パンツしかないのだから。

「臭ってきたなあ。」

そして彼はワキガでもあった。

船橋side

「ふう...ふう.....。」

口から出る息が熱い。首にかかったタオルが汗を吸って湿って気持ち悪い。

「おも、い。」

何故リュックにしなかったんだろう。

祭でもらった紙袋が容赦なく手に食い込む。買いすぎたんだろうか。

ちらりと見下ろせばあふれんばかりのグッズが船橋を励ます。

船橋が店の存在を知ったのは大好きなゆるキャラのブログでだった。
非公式のキャラだったが、積極的にイベントなどに参加し、ファンとの交流とも大事にする。
中の人はまだ若いと噂があるが、船橋は中の人なぞ居ないと信じている。

「いるかなあ。」

こくにゃん。

船橋は知らない。
視線をあげれば微かかもしれないが、彼が焦がれるこくにゃんが罵りながら歩いていることを。

竹内side

風が心地よい。竹内はバイクを走らせながら鼻歌を歌う。
初めて来た道ではあるが、一本だから迷うことはない。
今回は遠出だからジーンズだが、ロングスカートを履いてバイクの風ではためかせるのも好きだった。

「ごっは一ん、ごっは一ん♪」

大学のフリーペーパーに載ってたご飯情報だ。
少し遠い場所ではあるが、その分混むことはないし周りの景色も楽しめるらしい。
そこにざっとした地図だけ書いてあったが、十分わかるものだ。

「どんなご飯だろうなあ。」

竹内の趣味は新しい店を開拓することだ。
しかし大学で理系という女性が少ない学科にいるため、共に行ける友人は少ない。

「早くいこー。」

竹内は独り飯という状況を特に躊躇いを覚えないタイプの人間だった。

→ 2. 店内